

美紗
の
会

た
よ
り

梅が香によみがえる三人の女

西松 布咏

梅の花が一輪ずつほころぶ頃、夜更けになると私は三味線と共に三人の女になつて行つた。

近くに迫つた「貞女の夢・夢」公演のため繰返し唄つてゆくうちに過ぎし日々が鮮やかによみがえつてくる。

「艶容女舞衣」の「お園」は小唄の稽古を始めた二十代から唄つていた。夜更けに木枯らしを聞く暗い部屋の行燈が、ひとり針仕事をするお園を浮き上がらせるという場面をいつも想像していたが、哀しげな白い横顔が勘十郎さんの操る人形になるとはまさに夢のよう

でへ片糸の解いてあかせぬ物想い〜の切ない声が次第に浮き彫りされ、健気に夫の帰りを待つお園のすがたに大きくなつていった。

「桂川連理柵」の繁大夫節「帯屋」は地唄の西松文一師から伝授された。

明治四十一年に生まれて間もなく視力を失つた師は大阪文楽で鶴沢雷三の名で修行に励んでいたが、人形の動きを見ることが出来ない盲人は不採用との風潮を機に義太夫を断念し、地唄の道を歩むことになる。

地唄舞の舞台で無心に唄う師の姿に魅せられ、ただ一人の弟子となり差し向かいの稽古は厳しかつたが、心かよう至福の時間であった。

「帯屋」を舞台にかけたのは青山円形劇場で一九八九年のリサイタルⅢ【哀すれば唄】が最初だった。

ふとしたことから隣に住むあどけない十六歳の娘お半に夢中になる夫の心を取り戻そと、必死で口説く

妻お絹のやるせなさをエリックサティの【ヴェクサシオン・いらだちの意】のピアノをバックに唄つた。が：その冒険は賛否両論であったのもなつかしく思い出す。稽古の後で茶飲み話の折に「私だったら心根の優しいお絹さん大事にするけどねえ」としみじみ語つた師がやむなく断念した義太夫とのリミックスをどう仰るだろうか…。

「橋姫」は【日本の伝統芸・孝の会】の時に演目のひとつとして馬場あきこさんの流麗な詞を舞踊曲にして欲しいとの依頼を受け、七転八倒の末ようやく完成し、初演の運びとなつたは何と今回と同じ日の二〇一二年二月二十一日。

能楽師の津村礼次郎師の重厚な仕舞や、今は亡き竹本朝重師の胸に響く義太夫の語りと共に発表させていただいた感激は未だに忘れないことが出来ない。

爾来日本舞踊、地唄舞、舞踏の方々と共に演してゆくうちに橋姫の想いかたちはゆるやかに変わつていった。当時は、恋した男の心変わりを恨み、果ては貴船の神にへ恨みの鬼となり憂きひとに思い知らせんと毅然と訴えるように叫ぶ鬼に化身して幕としたが、いつの頃からか終わりは、恨みながら恋しや…と心の底に燃え続ける微かなうそくの揺らぎを唄うようにした。

後世その恨みは様々にかたちを変えながら、やがては苦しんだ末へ橋姫伝説となり、人々を救う橋の守り神にまでたどり着ついた女心の変遷をしみじみ愛おしい想いながら…繰返し唄い推敲していつの八年の年月と共に、私の内なる想いの丈もいつしか変つていつたのだと思う。

鬼となるほどの恨みは、想えばこそその哀しい心の裏返しであり、時の流れと共に永遠の恋へと天に届く一本の細い糸に昇華してゆく。

源氏物語に登場する六条御息所も、嫉妬のあまり枕辺で魂が身体から遊離するほどの恨みで【葵の上】を呪い殺すが、やがては仏門に帰依し、愛しい源氏の君を超えてゆく。

昔の女は、流す涙の川に溺れることなく凜とした姿でやがては恋した男から発つてゆく…と夜更けに胸を熱しながら唄い続けた。



そして春宵のように暖かな一月二十一日は、実相寺に隣接する「池上梅園」の梅の香が闇を透くように優しく包み、満員のお客様の前に立った黒子の折の音で幕が開いた。

義太夫の大棹と大夫の渋く響く声の横糸が波のように拡がり、中棹の音と共に唄う女心は微妙に縦糸に伸びゆく。哀しみを秘めた女の貌は勘十郎さんの手繰る糸で縦横無尽によみがえり、江戸唄と文楽のリミックスはそれぞれに三人の女の恋心を芳しく匂い立せたように思う。



幻想の声が聞こえる—「貞女の夢・傳 文楽×江戸唄リミックス」

ヤリタ ミサコ

早春の夜の空気が、梅園の香りを運んでくる。畳に座ると部屋のしつらいに目が行く。實相寺の室内壁には、一見子どものイタズラ描きのような、画家村上豊による、のびやかな弁財天が豊満な肢体をくねらせて

いる。見えない音楽が鳴っているようだ。誰もが微笑む。そして節分の鬼のようなく、トリックスターのようなく、満員のお客様の前に立った黒子の折の音で幕が開いた。

義太夫の大棹と大夫の渋く響く声の横糸が波のように拡がり、中棹の音と共に唄う女心は微妙に縦糸に伸びゆく。哀しみを秘めた女の貌は勘十郎さんの手繰る糸で縦横無尽によみがえり、江戸唄と文楽のリミックスはそれぞれに三人の女の恋心を芳しく匂い立せたように思う。

主たちといつた風情。壁全体に、動的リズムとポジティブなエネルギーと遊び心が満載だ。お寺の壁という固体な先入観を壊すユニークさ。この弁天様といたずら坊主たちと共演するのは、楽しいだろうな。

黒い屏風が正面に置かれている。和紙の表情が豊かなので、塗り込められた黒という窮屈な感じではなく、開放的で明るい黒。金で描かれた満月が、フルムーンではなく、どこか三日月のような満月なのだ。控えめな光で、ゆつたりと受け身の満月。横に広い舞台としてセッティングされているため、この屏風が空間を漂とひきしめている。

始まりは布咏さんの小唄、お園の一人語り。細いけれど主張のある声が、三味線の糸の纖細な音にのせて、揺れ動く感情を表現する。お園・お絹・橋姫の三人を描くこの日の演目タイトルは「貞女の夢・傳」と題されているが、この日の貞女たちは、すれ違う男を思い続ける女たちのこと。男だって貞女を思っていないわけではない。が見えない何かのきっかけで現実の二人は交錯し、離れていく。しかし貞女たちは、男への強い思慕を持ち続ける。不在の男を思いやり、家族を思いやり、心変わりした男を思いつめ、恋慕の情は一層強くなっていく。

文楽人形が生き生きと演技をする。遣われている人形からこぼれ出てくる、抑えた情感の大きさ。涙も見えるし、溜息も聞こえる。行燈の傍らに、見えない思いが流れ落ちて溢れてゆく。通常の文楽は男声の義太夫節だが、女形人形の一人称の語りとして、布咏さんの女声がびつたりだ。伝統ある人形淨瑠璃のスタイルは完成された様式だが、女の一人称の吐息に込めた複雑な思いというのは、細い女声が語ることで人形と一

致する。この唄の最後は「針のあと」と声を止めて終わる。ある意味では決意のようだ。女の意志の表現がすばらしかった。

二番目のお絹は、人形の出演がないにも関わらず、数日後に思い出すと幻影のように残像のように人形が見える気がする。繁太夫節と義太夫節の語りが耳から映像化されて感じられるからだ。ここでは男声が夫、布咏さんが女房、とキャラクターが分かれての唄なので、それ違い具合もよくわかる。ナレーションを含む男声の語りと太棹はメリハリがきいていて、リズミカルにストーリーを追える。

三番目の橋姫は二〇〇六年に美しい日本舞踊ヴァージョンでも拝見したが、身体性に拘束されない人形の方が強い情念を自由に表現できるので、人形ヴァージョンの方が幻想性が強く感じられた。太棹の低い音、ある



時は胡弓で女の泣く声のような音、男声と女声の二二ゾンがあつたり、三味線の音色の違いが際立つて聞こえる場面、般若の面への変身、とスリル満点、見どころ聞きどころ満載だった。鬼女となり般若となつた橋姫は、怨みとか呪詛というより悲しみの塊となつてゐる。布咏さんの声が悲痛な息になつてつーーっと細く長く伸びると、身体の限界を超えた感情が圧倒的存在となつて襲つてきた。「恨みながら恋しや」と、絞り出さようにフェイドアウトする声はどこまでも続き、切なさに涙が出た。

義太夫との共演ゆえに、いつも以上に女声の艶を感じる。時に布咏さんの声は、高音のゾクゾクする、一瞬だけ感電するような感応。気が遠くなるような、時間が軸が瞬間に蒸発してしまつたような、空気の沸点しているような、そんな強い力があつた。桐竹勘十郎さんの遣う人形が声をもつていたら、こうであろう、と。



勘十郎さんの説明では人形の本体というような仕組みはなくて、遣い手の左腕が身体の中心となり、人形の肩と襟とで全体のたたずまいを表現するということだ。幻想の存在だと思った。本来は命のない人形が生き生きと豊かな感情を表出し、江戸時代に唄われた情感が凝縮され純化され、人形の声となる。この幻想の魔術に、至福の時を過ごした。

女性の怖さといいますか、人の想いの重さを改めて認識することができました。

文楽×江戸唄が魅せてくれた世界

四家 聰

一月に大学の講座で西松布咏先生の唄と三味線を聴いて以来、三味線音楽に興味がわきました。それで、「貞女の夢・夢文樂×江戸唄リミックス」の公演案内を頂いたとき、学生の自分にとってはチケットの得段がちょっと高かつたのですが、「貞女」という今や死語にもなりかねない古めかしい題もなんか古典落語的に感じ、観に行くことにしました。当日会場に入ると、コンサートや舞台演劇とは違つた空氣があり、静かな興奮が会場を包んでいました。今まで自分が体験したことの無い雰囲気です。これは、落語のときのように気軽にお煎餅を食べながら……というわけにはいかないなあと思いました。

やがて、舞台下手に位置した西松先生の唄と三味線「お園」が会場を静かに浸透していく、江戸唄の世界に引き込まれていきました。そして、「べべべえ〜ん」と舞台上手から太い三味線の音がして義太夫となり、これまでのクリスタルな音印象にこつごつと凹凸を刻んでいきます、あつ、これがリミックスなのかと感じました。しかし、文楽が初めての自分には、太夫が何を語っているのか良く理解できない部分も多く、自然と目は当日の解説ペーパーに落ちていきます。人形の動きも見たいのに見ているものは手元の紙一枚、舞台と手元

を交互に見るということを繰り返していました。

ですが、文楽×江戸唄リミックスが僕に魅せてくれた世界は難解なものではなく、じごく単純なものでした。それは愛の世界。浮氣をするは男の罪、それを許さないは女の罪というように、そこには深い愛の世界がありました。

女性の怖さといいますか、人の想いの重さを改めて認識することができました。

秋葉原、奇跡の一夜

福岡 俊弘

今にも空から雪が落ちてきそうなくらいに寒い日だつた。師匠同伴のイベントはいつも厳しい天候になると。豪雨、強風、嵐……。土砂降りの赤坂、冷たい雨の軽井沢。そう言えば、一年前の秋葉原も雪がはらりと舞う凍えそうな夜だつたような。

神田明神下、というと江戸的な風情の響きがあるが、その交差点が一メートルでも中央通り寄りに入れば、そこは見紛うことなく秋葉原である。家電の町からパソコンの都へ、そして今やアニメとマンガ、フィギュアで埋め尽くされる日本ポップカルチャーランドだつた秋葉原。この秋葉原と西松師匠のマッチングというだけで、もう相当にアレである。そりや雪だつて霰だつて降ろうものなのだ。



今シーズヽハ二年目となつた「デジタルハリウッド大学」での教鞭。「情報編集」という講義は、今年も締めのテーマは『江戸の編集術』だ。一年間、やはり同じテーマの下、「江戸の恋」をモチーフにした端唄、小唄を、師匠に学生の前で唄つていただいた。そのときの学生（今は卒業生）に会うと、いつも必ず、あのときの師匠の唄と三味線の話になる。「めちゃくちゃ印象に残つてします」。確実に若い学生たちの何かを揺さぶつた。

今年の学生にもそんない体験をさせたいといひ、非礼と無礼を承知で師匠に再度の登壇をねがつた。「どういうテーマでやるか、考えといて下さ」。快諾の条件はそれだつた。散々悩んだのだが、春の「美紗の会」用の演目を選んでいるときの師匠との会話がヒントになつた。「年の瀬や」は季節が違うからできないわね……。

そんなわけで、テーマは「四季」である。一年分を一度に聴きたいという贅沢な願いをかなえる、魔法の言葉である。

【春】春風がそよそよと、夜桜、【夏】勝名のり、【秋】秋の夜、【冬】雪は巴、吉三節分

どうです？ 本当に贅沢なラインアップでしょ。

一月下旬、締めに唄つていただいた吉三節分なんかもう季節感バツチりで、といひで、これは個人的に思つてゐることなんですが、師匠つて「冬」と「春」が似合つてこねと思いませんか？ あ、いえ失礼しました、余計な話でしたね（笑）。

とにかく、これで終わらなかつた。桂川が最後にあつたのだ。

繁大夫節「帯屋」

そう、実相寺で披露されたあの唄。あまりの迫力に、学生たちがみんな身を前に乗り出したのがわかつた。最後の「シャン」の音のあと、しげらぐ声が出なかつた。またしても奇跡の一夜。やせのねいは秋葉原でなくなり、江戸の神田になつた。やつぱり、これは雪でも降つてくれなくちゃ、わ。

後日、学生たちからメールがいくつか届いた。「三味線の授業、最高でした。いつか弾いてみたいですね」。学生からのこの文面を、師匠へのお礼の代わりとされさせていただきたく思います。

ホームページが一新されたのをご存知ですか？

虹色に彩られたページに美紗の会の「コンセプト、公演スケジュール、西松布咏のプロフィール、これまで発刊されてきた「たより」などが一読できぬよになつています。そして、様々に拡がつてゆく美紗の会でありたいと願う西松布咏の日々のつぶやきを綴る[月虹の栄]を掲載しています。是非一度ページを開いてみてくださいね。

<http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/nisimatu/files/gekkou.html>

《今後の公演予定》

平成二十一年四月三日(土)午後一時開演

赤坂 泉くらぶ

第三十九回 美紗の会のつむじ
美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

平成二十一年六月一十五日(金)午後六時半開演

深谷縁切寺満徳寺

唄と三味線のつむじ

水鏡 嘩・三絃 西松布咏

珠取り 森本純女

平成二十一年七月九日(金)午後六時半開演

渋谷 東急セルリアンタワー能楽堂

地唄舞 森本純女リサイタル

水鏡 嘩・三絃 西松布咏

■ たより第65号

■ 編集責任者	美紗の会
■ デザイン	大久保朋子
■ 美紗の会	近藤幹則
■ 主宰	西松布咏
■ 電話	西松布咏
■ 稽古場	港区白金台二一一一二 白金台プレイス三階 (三四四一)一七一六 (四四四七)一四一一



E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:<http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/>